

アムスルだより

No.20 1996年 7月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



サンゴ礁の主役

-ミドリイシ-

枝サンゴやテーブルサンゴなどと呼ばれ、阿嘉島の周辺で皆さんが最もよく目にするサンゴ、それは和名で「ミドリイシ属」(学名は Acropora) という仲間です。ミドリイシといっても緑色だけでなく、茶色、青、ピンクなどさまざまな色をしています。ここ慶良間では、これまでに 59 属 248 種のサンゴが確認されましたが、この内の 4 分の 1 にあたる約 60 種が、わずか 1 属のミドリイシで占められます。そして、毎年 5~6 月に見られる大規模なサンゴの一斉産卵は、このミドリイシによるものです。アムスルの研究成果を掲載している機関誌「みどりいし」も、このサンゴから名付けられました。

さて、さまざまな形の群体をもつミドリイシですが、その大きな特徴は、それぞれの枝の先端にある頂端ポリプと、側面にある側生ポリプという 2 種類の違ったポリプを持っていることです。学名である Acropora は、頂上の (acro) 細かい穴 (pora) という意味

で、この属の特徴をよく表しています。ポリプの形をよく観察してみてください。ミドリイシ以外のサンゴは、群体のすべてのポリプが同じような形をしているため、簡単に区別がつくはずですが。

多くのミドリイシは先に空間を確保するように成長するため、他のサンゴの上を覆ってしまうことができます。サンゴは光がないと生きていけないので、成長の速さは空間をめぐる競争に有利なことだと言えるでしょう。実際に 1991 年 7 月の調査では、ニシハマ水深 1m 地点のサンゴの総被覆度のうち 85%がミドリイシでした。

ところが、ミドリイシは成長が速い反面、骨格がもろく折れやすいという欠点もあります。先ほど例にあげたニシハマでは、1991 年の 9 月に台風 19 号 (最大瞬間風速 32m/s : 渡嘉敷観測所) の被害を受け、ミドリイシの割合は 66%に減ってしまいました。

この様に壊れやすいことは一見不利なように見えますが、折れて散らばった枝が成長することによって分布を広げられるという利点もあります。そこで、この繁殖方法を利用して、荒廃したサンゴ礁にサンゴの枝を移植することも試みられています。しかし、すぐに再生するからといって、少しぐらい

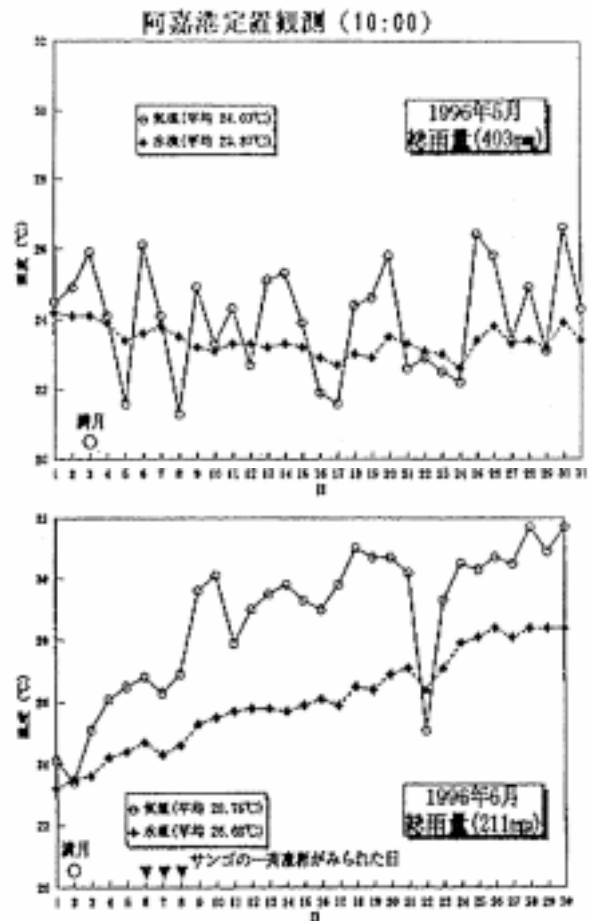
人が壊しても大丈夫というのは間違いです。オーストラリアではレジャーダイバーがよく潜る場所のサンゴ礁は、他の場所と比較して、確実に荒廃が進んでいるという報告もあります。

また、ミドリイシは多くの生物に住みかた餌を与えますが、オニヒトデなどの異常発生では、最も大きな被害を受けます。それでも、成長の速いミドリイシは、被害の後速やかに回復することができます。しかし、ミドリイシは環境変化に比較的弱く、汚染された海ではまっ先に死んでしまい、再生することもできません。サンゴ礁の主役ミドリイシが生育できる健康なサンゴ礁を保全するためには、その生育環境を守ることが大切なのです。

阿嘉島の海より

-サンゴ産卵観察会-

阿嘉小学校では、郷土の自然に親しみ、環境保全の大切さを学習することを目的に、サンゴの自由研究を行っています。5月にはグラスボートで阿嘉島周辺のサンゴ礁を観察し、皆が描いたサンゴのスケッチや生きたサンゴなどを見ながら、サンゴはどんな生き物かを考えたりしました。そして、6月5、6日の夜にはサンゴ産卵観察会を行いました。今年は例年より水温の上昇が遅れたためか、ミドリイシの一斉産卵は予想より遅れ、満月から4日後の6月6日から8日にかけて見られました。あいにく6日は雨のため、教室に水槽を持ち込んでの産卵観察になりましたが、子供たちはサンゴの命の誕生を興奮しながら見守っていました。



この日産まれたサンゴの卵は、子供たちの観察のもと、翌日にはプラヌラ幼生になり、6日後には小石に着生し、新たなサンゴになりました。子供たちが率先して研究を進め、私たちが住む阿嘉島の素晴らしいサンゴ礁について理解を深めてもらえれば幸いです。

-国際サンゴ礁シンポジウム-

6月24~29日にパナマで開催された国際サンゴ礁シンポジウムには、世界各国から約1500名ものサンゴ礁研究者が集まり、研究発表や情報交換が行われました。アムスルからは下池が出席しましたが、ここで得た情報をもとに、慶良間列島のサンゴ礁保全のため、さらに研究を進めていきたいと思ひます。